

子どもと家族と学校と

⑨

『留年する生徒ゼロのクラス担任』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

不登校状態にある生徒さんとその家族を長年、支援してきた。少しずつ世の中の関心も広がり、いまでは小学生中学生の不登校はかなり理解されている。

高校生になると気がかりなのは、欠席日数オーバーによる原級留め置き、つまり留年。次年度にもう一度同じ学年を繰り返すことになる。

「留年するぐらいだったら学校をやめる」とあっさり退学を選ぶ生徒も少なくない。特に高校一年生の中退が目立つ。

在籍高校から単位制通信制高校への転校や高校卒業認定試験の利用など、さまざまな制度が準備されているようになった。

選択肢は増えたが、やはり入学した高校において順調にすすんで卒業したいと思っている生徒は多いだろう。

そこで、あらためて気がついたことがある。

担任教師のサポートの素晴らしさだ。

ある高校の〇先生から紹介された生徒達は必ずと言ってよいほど短期間で解決しているのだ。そのクラスの生徒は留年するひとはいないという。

どういう対応のコツがあるのか、今回は、家族支援心理カウンセラーの立場から、留年する生徒ゼロのクラス担任。その動き方を五つにまとめてみた。

生徒対応のコツ

欠席理由の把握

家族との協力関係づくり

適切な専門機関を紹介

紹介後のサポート

地道にすばやく広い視野で動く



担任教員の生徒家族対応

CONには、「不登校で欠席日数が多く、留年するかもしれない」高校生が家族とともに相談に訪れている。

とても困っているのになんとかしたいという意識よりも、高校の先生から相談に行くようにすすめられたので、最初はしぶしぶ来所している様子だ。

担任による紹介の仕方がとてもスムーズな場合は、初回面接から、高校生の本

人と両親がそろって相談に来ることが多く、気持ちのよいスタートとなる。事前に担任が家族面接の重要性を家族に丁寧に伝えていることがうかがえる。

目立って特別な動きをするわけではないが、カウンセリングがうまくすすむように調整する担任教師がいると、カウンセリングに入りやすい土台作りができていく。

では、クラス担任が、カウンセリングを家族に紹介するまでの経過について記してみる。



連続欠席の理由を明確にする

まず、受け持っているクラスの生徒が連続して欠席した場合、しばらく様子を見るのではなく、休んでいる状況を把握するために、ただちに保護者に連絡をとる。

単なる体調不良だといってあいまいな理由の欠席もある。ときに、制服を着て自宅を出たものの、学校に行っていないことがわかって家族もあわてたりする。

欠席の場合は、病院で診察を受けているのか、医師の診断はどうなのかを家族に確認し、なんとなくしんどくて家にいる状態だとわかると、不登校の可能性も視野に入れて今後のプランを立てていく。

保護者はわが子が不登校であることを現実に認めたくないため、見守っている間に、ずるずると欠席日数が増えて対応が遅れてしまう。そのような事態にならないように、生徒や家族に任せるとはせず、早く早めにかかわっていく。



家での様子を家族にきく

次にポイントとなるのは、気になる状態があれば、家族とコンタクトをとること。

家庭訪問して本人と話をする。ただし生徒本人と直接に話せないあるいは、会うことができない場合もある。生徒との関係をつくりながらも、並行して、保護者から生徒さんの様子を詳しくきく。

学校を休んでどのように日々を過ごしているのか、どのように家族がかかわっているのか、家族の問題点を詮索するのが目的ではなく、現在なにが起こっているのかの情報を得ておく。あくまでも原因探しい悪者探しはしない。

○先生の話では、つねに家族とうまく話し合いができるとは限らないという。欠席日数が増えていくと、学校に保護者に来てもらい、家での生徒さんの様子をたずねようとするが、

「仕事があるから学校に出向くことはできない」と返事が返ってくることもしばしばある。それでも保護者となんとかあつて、顔を突き合わせて、家での様子を確かめる。

そうしているうちに家族にもこのままではいけないという問題意識ができてくる。

そこで、担任は、家族から得た情報をまとめて総合的に判断し、専門機関を紹介する。

◇
専門機関につなげる

動きが早い。

「わが校の〇〇さん家族にCONを紹介しました。連絡があると思いますので、よろしくお願ひします。」

と電話が入る。

続いて、家族から申込の電話連絡があり、面接の予約がはいる。

「担任の先生からうかがっています」と私が電話口で話す、家族も安心するのか、簡単に欠席状況をきいて、こちらも事務説明をすますと、すぐに予約日時が決まり、初回面接へとつながる。

適切な対応で素晴らしいなと感じるとことは、不登校などで困った状態にある家族がどの専門機関にかかればよいのかとても的確に判断していることだ。

家族カウンセリング機関、思春期専門の神経科、あるいは総合病院、ときに、体の調子を整えるために整骨院、その上担当者が女性なのか男性であるのかも把握したうえで生徒と家族に適した紹介をしている。

まるで、ソーシャルワーカーのようなネットワーク力。なかなかここまで動ける先生はいない。

◇
紹介しっぱなしにしない

紹介の仕方もかなり配慮がなされている。

家族は学校から専門機関にいくようにいわれると、やっかいもの扱いにされた

という思いや問題児扱いにされたという思いが生まれることがある。

これらは全くの誤解だが、もしもそのような思いの中で、医療機関の受診やカウンセリングに通うことになるとその後、学校との信頼関係や、相談機関とのつながりもぎくしゃくしてくることが予想される。

そのため、

「専門機関の方針にしたがって、高校側も対応して解決に協力したいので、相談に行かれたあとも、ぜひ、どのような状況なのか、お知らせください」

と伝える。

専門機関にまかせっぱなしにしない担任の姿勢は、生徒や家族をほっとさせている。

◇
学校内関係者と情報交換

家族がカウンセリングに来られると、そののち、初回面接での様子を学校側に報告する。いうまでもなく、家族に了承を得てからの報告で、必要に応じてカウンセラーが学校訪問もする。

学校訪問時には、面接をすることによって判断したことを担任に説明しつつ、学校側の内規ルールの確認をする。

特に現在欠席日数がどのぐらいなのか、あと何回の欠席で、留年になるのかの数字を把握する。

学校の担任だけでなく、学年主任あるいは、クラブ顧問など、その生徒さんにかかわっている先生方にお会いして、生徒さんの高校の教室のできごと、クラ

ブ活動の情報などをうかがうと、知らない情報がぞくぞくと集まってきて、家族のことがいろいろな面から理解がすすみ多角的なものを見方ができるようになる。また、学校行事の特徴などをお聞きして、その準備をすることになる。

学校関係者と相談機関が連携することができるのも、調整役に動いてくださる担任の影響が大きく、関係機関の強いネットワークが生まれる。

カウンセラーは、面接室のできごとだけで、家族や生徒さんを理解できないので、関係者から一気に情報を集めることは、数回分の面接に匹敵するほど効果がある。



関係する機関が同じ方針で動く

不登校や問題行動に対して解決力のある教員の行動をみていると、特に秘策があるわけではない。ひとつひとつ駒を動かしていくように地道に動いている。ただしその取り組むスピードはかなり素早い。

そして、家族と歩調をあわせ対立しないように、一体となって問題解決する状況をつくっている。

また、それを同じく専門機関ともうまく歩調を合わせ、同じ方針を確認しながら、日々の情報が更新している。

各関係機関が得意分野を活かして、動くことができるように、担任教師の関係者間の調整が、問題解決への原動力となる。

担任は、欠席している生徒の気持ちを

理解することに関心が向きがちだが、子どもの保護者、そして専門機関の協力など広い視野で支えていく視点が必要だ。

スクールソーシャルワーカーも兼任しているような担任教員が増えることを期待している。